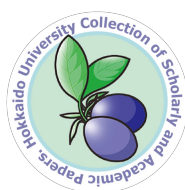




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	越境する主人公 : ” 黒猫警長” 世界の、そのはしっこのはなし
Author(s)	加部, 勇一郎
Citation	連環画研究, 1, 47-61
Issue Date	2012-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98378
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98378
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_1_47-61.pdf



ヒーロー 越境する主人公

—— “黒猫警長” 世界の、そのはしっこのはなし

加部 勇一郎

“黒猫警長” 世界に映るもの

近年、中国の衣料品会社メタスバンウェイが、ドリームワークス、サンリオ、上海美術電影製片廠の三社と提携して、各社の有名キャラクターをプリントしたTシャツを売り出した。すでに世界にその名と形が知られる“シュレック”や『カンフーパンダ』の“ポー”、“キティちゃん”に並ぶ存在として、中国から選ばれたのは、“孫悟空”に“ナタ太子”、そして“黒猫警長”であった¹。

“黒猫警長”は、“孫悟空”や“ナタ太子”のように昔から知られてきたキャラクターと比べれば、その格はやや低いと言うべきかもしれない²。しかし、メタスバンウェイに置かれた広告チラシには、この“黒猫警長”Tシャツをスタイリッシュに着こなすモデルの一人に、中華圏で絶大な人気を誇るミュージシャン、ジェイ・チョウ（周杰倫）があてられているのであって、このことが、“黒猫警長”と言う存在の、現在の若者の間での圧倒的な知名度を、端的に表わしているとも言えるのである（図1）。

“黒猫警長”は、児童文学者である諸志祥によって生み出された児童文学『黒猫警長』（福建少年兒童出版社、1982）の主人公である。そして、その小説の登場から二年後、上海美術電影製片廠によって作られる同名アニメの全国的な浸透を契機として、その名と形が爆発的に広まっていったキャラクターである。つまりその活躍は、せい

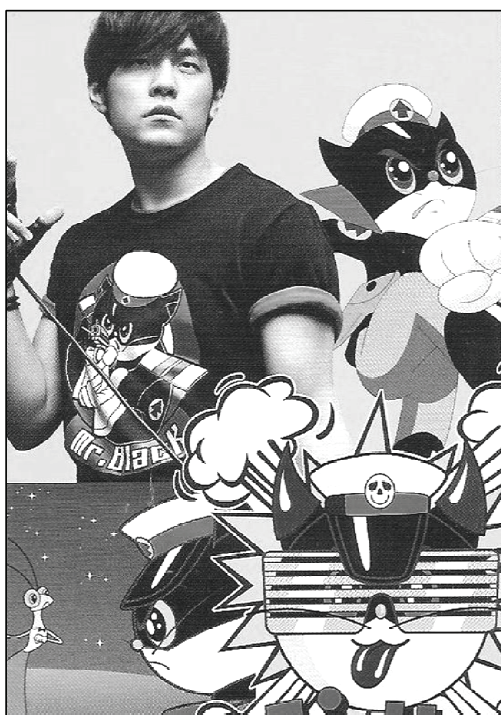


図1 メタスバンウェイのチラシより

ぜいここ 30 年ほどのことであり、かたや“孫悟空”が、小説や演劇、映画やアニメと、国境を越えた活躍を遂げているキャラクターであるのに比べたら、やはり両者には雲泥の差があると言うべきだろう。

しかし“黒猫警長”は、その活躍の短さのわりに、現代中国に生きる若者でその存在を知らないものはいないと言ってよく、その活躍の幅広さといったら、新興のキャラクターの中では他の追随を許さない存在なのである。そのことは、上記の小説とアニメに影響を受けて生まれた“黒猫警長”の登場する物語（以下“黒猫警長”物語とする）が、80 年代後半から 90 年代にかけて、小説・映像・連環画・マンガ・朗読図書など、さまざまな形式をとりながら現われていること、そしてさらに、それらを下地として生み出された「二次的著作物」³が山のような量であることが傍証となるだろう⁴。結果、登場からおよそ 30 年を経た現在では、“黒猫警長”物語が作り出す“黒猫警長”世界は、総体として、内容と形象の点で膨大なバリエーションを有する、カオス的な状況を呈するに至っている。その状況は、核となる物語が人々によってさまざまな「働きかけ」を施された末のものに他ならず、ならば、そのように作り上げられた世界は、多くの人々の意識と無意識を取り込みつつ成長を遂げてきた存在であるに違いない。それはすなわち、一つの核となる物語がどのようにして、人々に消費・内面化・再創造されるか、ということをつかむための格好の例なのであり、その中に潜むすべての事例は、80 年代以降の現代中国に生きる中国人民の世界観——英雄像、動物観、人間観など——を映し出す鏡の役割を果たすだろうこと、疑いないのである。

それは例えるなら、大海に落ちた石ころのようなものだ。諸志祥の生み出した“黒猫警長”は、中国に、未だ収まり止まぬ波紋を生み出したのである。水の運動は外へ向かっていくのだが、それが波紋であるからには、中央から離れるほどにぼんやりと不明瞭なものとなり、あたかも伝言ゲームのように、伝えられるべきことがゆがんでしまったりもする。そして、ときによそで生まれた波紋とぶつかったりする——本稿が取り上げるのは、そんなはしっこのことからについてである。

ヒーローたちの衝突と和解

本稿が取り上げるような、周縁の“黒猫警長”物語には、たいてい、原著者である諸志祥の名は冠されない。そこに登場する“黒猫警長”のかたちはヘンテコで、線はゆがみデッサンは狂い、ストーリーにもほころびが見られ、推敲が圧倒的に足りていないものばかりである。しかし“黒猫警長”に関する基本的なことがら、さらに言えば、そのキャラクターを成り立たせるための図像的もしくは性格的な約束事などは、おおむねきちんと守られているのであり、その点で“黒猫警長”物語のバリエーションの一つであると認めるべきものである。⁵

“黒猫警長”物語は、中央のものも周縁のものも、たいてい、ある時ある場所で事

件が起こり、黒猫警長に通報の電話がいく、といった風に始まる(図2)。事件の内容は、軽めの盗難から重めの殺人までさまざまあり、たいていは、“黒猫警長”の迅速な現場到着と綿密な科学捜査の結果、事件は首尾よく解決へ向かうことになる。本稿が取り上げる周縁の物語群もまた、多くはこのような流れをとり、たいていはそれらが、いいかげんなプロットと絵で語られるだけであるから、取り立てて述べることもそうないように思われるのではあるが、しかし、見過ごせない現象も確かにあるようなのである。いまここで気になっているのは、“黒猫警長”世界の周縁に、よそからゲストを招く「特別編」とでも呼ぶべき物語が、大量に生み出されているという点である。

ゲストの名を具体的に挙げれば、それらは、中国生まれの“孫悟空”や“ひょうたん兄弟”^{きょうだい} (胡蘆娃^{フルーワー})、日本生まれの“ウルトラマン”、“聖闘士星矢”^{セイントセイヤ}、“ドラえもん”、その他“トランスフォーマー”や“忍者タートルズ”などである。いずれも、よその物語の主人公たち^{ヒーロー}であって、彼らが“黒猫警長”物語に登場するときは、たいてい、“黒猫警長”とぶつかり、あらそう、といった流れになる。

ここに、そういった流れの物語を三つ収めるマンガ本がある⁶。一つずつ見ていこう。

第一話「抓獲紅狐精」：“ひょうたん兄弟”^{きょうだい} (胡蘆娃の兄妹版)の育てているひょうたんが、何者かによって盗まれてしまう。犯人捜しをする兄の目に止まったのは、巡回中の“黒猫警長”とその部下たち。彼らを犯人とみなした兄が、得意の電光で“黒猫警長”らを攻撃すると、“黒猫警長”の側も近代兵器で対抗する。兄妹が連携プレーで火炎を放射すれば、“黒猫警長”も巨大な大砲で立ち向かう(図3)——そこに一匹、過熱する戦いをこっそり眺めるキツネがおり、存在を見咎めた“黒猫警長”からは「ヤツだったのか〈原来是它〉」の一言。果たして、両者の戦いは誤解から生まれたことが判明し、“黒猫警長”と“ひょう



図2 それは一本の電話から始まる……

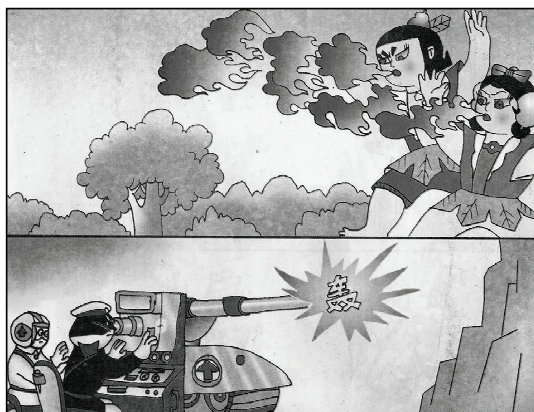


図3 黒猫警長 vs ひょうたん兄妹

うたん兄妹”は、協力して事の元凶であるキツネを捕らえるに至った。

第二話「撃斃白蟻」：“黒猫警長”のもとに、森林飯店が何者かに奇襲を受けたとの通報が入る。調査に乗り出した“黒猫警長”の前に現れたのは、なんと“ウルトラマン”。“黒猫警長”は“ウルトラマン”を森林飯店を襲った犯人と早合点し、部下に攻撃命令を出してしまう。一方“ウルトラマンの側も、“黒猫警長”

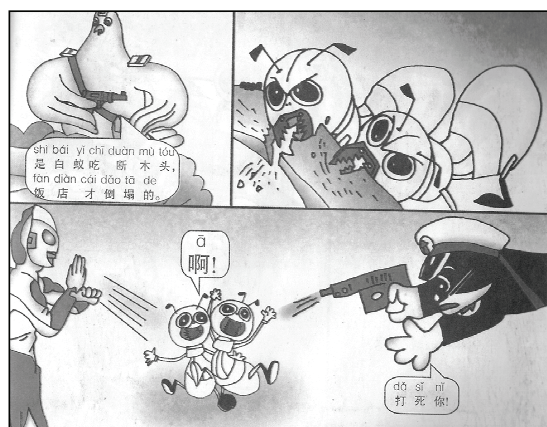


図4 黒猫警長 vs ウルトラマン

ら^{やから}を人類の平和を乱す輩と見なし、猛反撃。“ウルトラマン”のスペシウム光線に対抗するは、“黒猫警長”の^{アトミック・ガン}原弾手槍——そこに白ハト課報員から「本当に悪いのは白アリです」との報告が入る。“黒猫警長”とウルトラマンは戦いをやめ、協力して白アリを倒した(図4)。

第三話「智擒老鼠一支耳」：“黒猫警長”は、森林食堂に強盗が入ったとの通報を受け、調査に乗り出していた。そこに現れたのは、托鉢に来た猪八戒。“黒猫警長”は彼のどっぷりとした体を見て、食堂を襲った犯人であると早合点する。“黒猫警長”の「止まれ」の声に、ただでさえ托鉢がうまくいかずにイラついていた猪八戒は、ブチ切れてまぐわを取り出した(図5)。銃で迎え撃つ“黒猫警長”。猪八戒が身を^{ひるがえ}翻^{くう}して空に逃げると、“黒猫警長”は手榴弾を取り出した——そこに^{たいじょうろうくん}太上老君が現われ、真犯人は^{かたみみ}一只耳であると告げる。“黒猫警長”はそれを聞くと、自らの誤りを悟り、猪八戒にわびを入れると、一只耳を捕らえた。

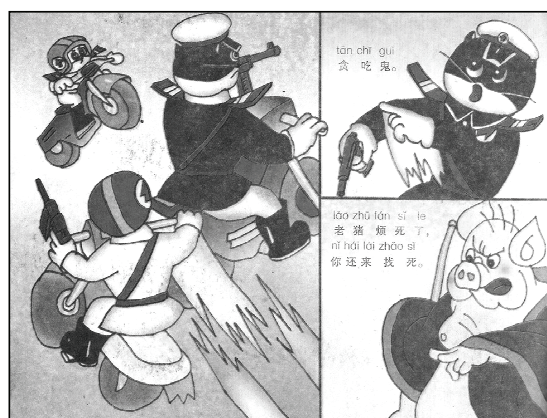


図5 黒猫警長 vs 猪八戒

これらの物語は、一見、書き手のまったくの自由創作のようにも見えるのだが、実際は、いずれもすでにある“黒猫警長”物語を加工してできている。要するに、既製の品をズラした結果のものということらしい⁷。とはいえ、本稿の主旨は、このような作品が往々にして持つ、デタラメさと陳腐さをあげつらうことにはない。そうではなくて、これらの作品を読み通した末に、ぼんやりとアタマの隅に残る、あるひとつの傾向について考えてみたいのである。

ここでは、“黒猫警長”と古今のヒーローとを出会わせようと腐心した書き手たちが、両者の登場にふさわしい物語を作るときに、キャラクターたちを流し込みがちな、その一つの型について、きちんと確認しなければならないのだ。どうやらこういったヒーローたちは、負けても、無様な姿をさらしても、いけないらしい。そして仮に、相手が罰するべき行動を取っていたように見えたとしても、たいていそれは、こちらの誤解によるものなのであり、元凶である真の敵が必ずどこかに潜んでいて、真相が明らかになったあかつきには、ともに協力してその真の敵を倒さなければならないと、どうやらそういったものらしい⁸のである。

他にも例を見てみよう。“黒猫警長”が“西遊記”世界とぶつかる物語の中には、“西遊記”世界に“黒猫警長”が紛れ込むといった体をとるものがある⁹。“孫悟空”一行が西へ向かう途中でのこと、例によって“三蔵法師”の肉を狙う妖怪が現われる。この妖怪、通常の“西遊記”物語であれば人間にでも化けるところだろうが、彼が化けたのはあろうことか“黒猫警長”そのひとであった（図6）。そして、



図6 黒猫警長に化けるキツネの化け物

その二セの“黒猫警長”は、“黒猫警長”らしく、「科学」を駆使して、巨大なロボットハンドをもって、“三蔵法師”をさらって行くのである（図7）。この妖怪、本性は赤毛のキツネなのだが、図像としては、アニメ『ひょうたん兄弟』に登場するヘビの化け物のそれが採用されている。



図7 さられる三蔵、高笑する二セ警長

“黒猫警長”を敵と誤認した“孫悟空”は、本物の“黒猫警長”に直接の戦いを挑む。如意棒を振るい分身の術で攪乱する“孫悟空”に、レーザー銃や催涙弾などの「科学」で対抗する“黒猫警長”。両者の戦いの行方やいかに——と言ったところで、すべてを見ていた“観音菩薩”が浄瓶を手にしてポヨヨンと現われ、“観音菩薩”のとりなしによって両者は和解する（図8）。そして両者の共通の敵を捕らえ、“三蔵法師”を救い出すに至り——その後は元通り、“孫悟空”一行は西天取經の旅を続けるのであった。

事件の発生と犯人の誤認、誤解の解消、真の敵の搜索とその撃退。そしてここにもまた、ヒーローを負けさせない力が、働いている。

忙しいヒーローたち

と、ここで一番大切なのは、こういった物語のみが量産されているわけでもないらしいことについて、なるべくとりこぼすことなく、考えようとしてみることだろう。伝言ゲームの果てに生み出された、周縁にうごめく愛すべきものたちは、どうやら単純に一つの理屈にまとめられるものでもないようなのだ。

ここで、アメリカのアニメ『トランスフォーマー』が“黒猫警長”世界と重なる物語¹⁰を見てみよう。これは、“^{メガトロン}威震天”をアタマとする“^{デストロン}霸天虎”が、エネルギーを求めて地球に侵入し、通報を受けた“^{コンボイ}黒猫警長”が、“^{ホイリジャック}擎天柱”“^{パンブル}千斤鼎”“^{スタースクリーム}大黄蜂”らの軍団と協力するはなし。“メガトロン”の背中の^{スタースクリーム}ビーム砲や、“^{スラッシュ}紅蜘蛛”の操る超時空ミサイルに、“黒猫警長”らは多くの犠牲を出しながら(図9)も、ラスト、“黒猫警長”の放つ一発の電子銃が“メガトロン”を真っ二つにし(図10)、地球の平和は無事守られ、幕を閉じることになる。紙幅の大半が銃撃戦や空中戦に費やされ、表情豊かな“トランスフォーマー”たちの図像が楽しい本である。ただし、主に活躍するのは“黒猫警長”とそ



図8 孫悟空 vs 黒猫警長、とりなす観音菩薩



図9 黒猫警長 vs トランスフォーマー

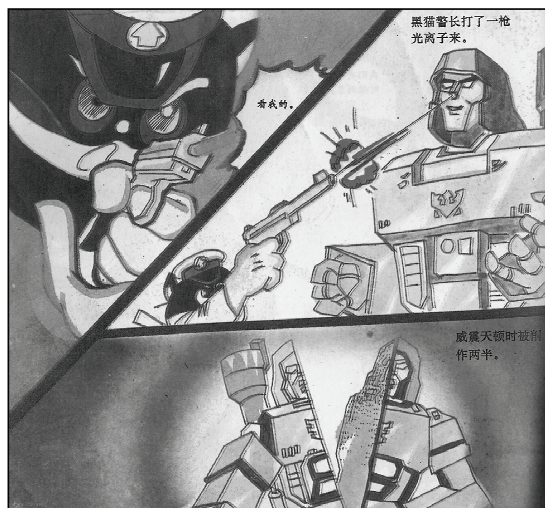


図10 警長の一撃でメガトロンは真っ二つに

の部下たちであって、その意味で“コンボイ”らはおまけに過ぎず、実際には単に、“メガトロン”というよその世界の悪者が、大量に地球に押し寄せて来たから、さあ大変、といったはなし。

この物語、「対決」の構えを見せているようでありながら、初めから二組のヒーローが、同じ側に立って悪に立ち向かう点で、ヒーロー同士の距離感が、上に挙げた物語群とは、やや異なっている。この図式は、日本のスーパー戦隊シリーズによくあるものと見られる¹¹。ちなみに、“トランスフォーマー”と“黒猫警長”が協力する物語は他にもあり、これは“忍者タートルズ”を共通の敵とするといったもの¹²で、彼らは地球にて、動物から生命液を搾り取り、世界の統治を目指すといった悪さを働くのであった。“忍者タートルズ”はよその世界のヒーローに違いなく、上の理屈から言えば、やられてはいけない存在のようにも思うのだが、この物語ではなぜか、倒すべき敵となってしまうている。

上にも見たとおり、『西遊記』の登場人物はこの種の書き手にとって格好の素材であったようで、“猪八戒”の登場するはなしは、ほかにも存在する¹³。これは、取経を終えたあとの、後日談の形を取り、イナカでのんびり暮らす“猪八戒”を主人公とするものだが、彼の度重なるスイカ泥棒に業を煮やした森の動物たちが、“黒猫警長”に“猪八戒”を懲らしめるよう依頼する、といったはなし。“黒猫警長”が、じしんの飛行船を巨大スイカに変えて、“猪八戒”をおびき寄せると、スイカ泥棒は見たこともないスイカに大喜び、しかし割って食べようにも、ナイフもまぐわも歯が立たない。そこへ“黒猫警長”が踏み込んで彼に拳銃を向けたのだった——84年版アニメの第二話を彷彿とさせる“白ハト諜報員”を交えた死闘(図11)の末、“猪八戒”は捕らえられ、“観音菩薩”の面前で裁かれる(図12)。赦しを請う“猪八戒”に、“観音菩薩”は、神山の守護三年を罰として与えた。

この物語には、上に見たような両者の衝突と和解、真の敵の発見、といった流

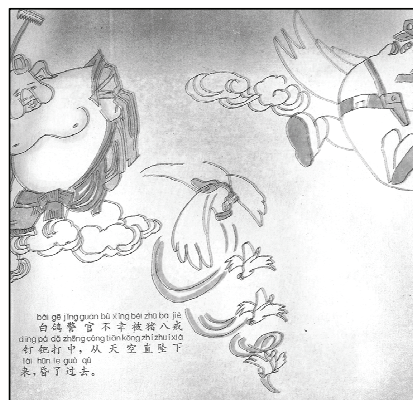


図11 白ハト諜報員 vs 猪八戒



図12 観音菩薩の前にひざまづく猪八戒

れはなく、“猪八戒”が負けてしまうのだが、それはあくまで、「おイタをする“猪八戒”を“黒猫警長”がこらしめる」といった体であって、完全なる敗北といった風でもないのである。つまるところ、これは“猪八戒”のキャラクターと関係し、彼は“孫悟空”とは違い、負けてもいいキャラクターということなのだ。“観音菩薩”に三年の刑期を言い渡されても、読み手から「あいつまたやってら」といった声が聞こえるような、そんなユルさが全体にはあるのであって、だいいち“猪八戒”が、こんなことで改心してしまっただけで、つまらないのである。だからだろう、書き手も彼を、撲滅すべき悪のように描いてはいないように思われる。ひょっとして、“黒猫警長”のようなタイプのヒーローにとって、“猪八戒”は、戦にくい相手ということかもしれない。

車田正美氏のマンガ『^{セイントセイヤ}聖闘士星矢』世界との重なりを見せるはなしも存在し、これは西方の^{セイント}“聖闘士”と“黒猫警長”率いる“二十八宿”（28人の戦士たち）が「九龍球」なる代物をめぐって戦いを繰り広げるといふもの¹⁴である。この物語、おそらくことばが十分に尽くされていないためだろう、何度読んでも筋がアタマに入らないのだが、両者の繰り出す必殺技が「霹靂電」だの「金剛豆雨」だのとテンションが高く、付されたイラストのヘンテコさとあいまって、むやみに楽しい。その結末は、両者の必殺技を繰り出した死闘の末、“黒猫警長”は“聖闘士”の能力の高さに感心し、友人として認めて再会を期する、といったものである。

気になるのは、“黒猫警長”以外の戦士がつけるプロテクターが、鳥山明氏のマンガ『ドラゴンボール』の登場人物が付けるそれを思わせること（図13）。そして、唯一ヘッドギアを装着しているために、かろうじて他との区別が可能。な“聖闘士”もまた、たまに「カメハメ波^は」のような手つきをすることだ（図14）。“黒猫警長”もどこかヘンテコで、服が緑色のためだろうか、人民解放軍のような雰囲気を感じている。

全体的に、きわめてほほえましい一冊ではあるが、“聖闘士”というキャラクターを保たせるのに必要な要素の書き

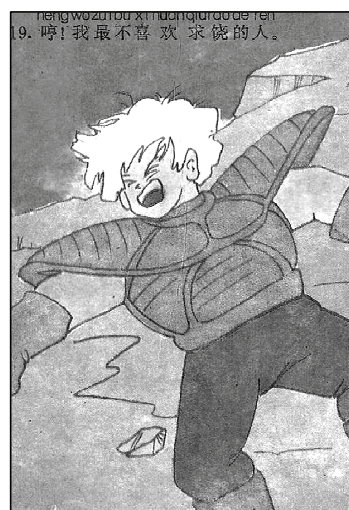


図13 二十八宿らしいが・・・



図14 黒猫警長 vs 聖闘士

込みが足りないために、その角度から見た限り、なんだかぼんやりとした話になってしまっている。ただしその一方で、“黒猫警長”が戦いながら相手を理解し、相手を認めて再会を誓う友となるあたり、現実の中国人とのつきあいの中でかいま見えるような図式が、やや突出した形で現われているようにも思われるのである。かりにこの先、“黒猫警長”と“二十八宿”の前に、新たな未知の敵が立ちはだかるなんてことがあったあかつきには、この“聖闘士”はおそらく、遠方からの協力を惜しまないことだろう。

以上、“黒猫警長”世界の周縁に位置するヒーロー対決の物語を、さまざま眺めてきたわけだが、この種の物語が大量に発生していることは、“黒猫警長”の波紋が、よその波紋とぶつかるほどに、広域に及んでいることを示している。それらは、権力者から遠い圏外にあるものにふさわしく、破天荒でデタラメだ。それは荒削りのものであるほど、より人々の世界観の深層を映し出す鏡となることだろう。

そしてここで、ひとつ言えることがあるとすれば、それはこれらの物語が、読み手にとって、単なる^{えそらごと}絵空事^{とど}に止まるものであるはずがない、ということだろう。なぜなら、書き手が、それら古今のヒーローを流し込む先として適当であると判断した、物語のひな型は、それが児童向けであればなおさらのこと、読み手が他者と折衝する際の、原始的なシナリオとして機能し得るものに違いないからである。これらのヒーローは、かつてともに過ごしたことのあるものたちの一部となって、いまでも生き続けていることだろう。

トレースの欲望

ところで、これら“黒猫警長”世界の周縁に位置するマンガ作品を眺めていると、繰り返し現れる特徴的な図版がいくつかあることに気づかされる。それらはどうやらトレースによって生み出されたようなのだが、写す際に参考とされた本の一つに、84年版アニメをマンガ化した『黒猫警長』¹⁵があったと思しい。以下にそれらを並べて見てみよう。スミに番号のついているものが、マンガ『黒猫警長』からの図版である。

まずは“黒猫警長”が「呵々大笑する場面」を見てみよう（図 15）。

これはもともと、アニメ第四話、“黒猫警長”が大量のイナゴを、火炎で一気に殲滅する場面のものであり、彼のまっすぐな正義感が少し恐ろしい、そんな場面のものでもある。か

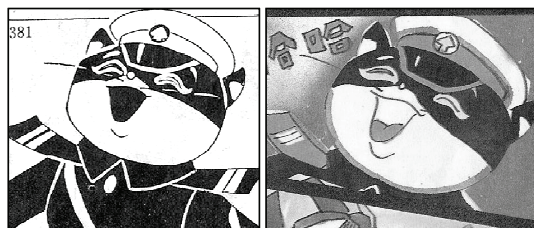


図 15 呵々大笑する場面

たや右図は“デストロン”の恐竜ロボットを粉碎した場面のもの。上げた顔の角度もほぼ同様で、とくにその目と口の形が特徴的だ。

次に、“黒猫警長”が「フィルムを眺める場面」も見てみよう(図16)。これはアニメ第二話、“黒猫警長”が“喫猴鷹^{サル食いタカ}”を犯人と同定する過程の一場面である。アニメではこの場面、非常に丁寧に描写され、“黒猫警長”の手元が狂ってフィルムが一度、手から離れてクルルと丸まってしまうあたり、非常に心地よい緊張感を伴うもので、アニメーターの「絵を動かすこと」へのこだわりがうかがえる。それはおそらく、こういった書き手にも伝わったことだろう。下図は“ドラえもん”世界と重なる“黒猫警長”物語(後述)のものである。挙げた腕の間から顔を出す“白猫班長”までもが、そっくりトレースされている。

右の“黒猫警長”が「通報を受ける場面」も、周縁の作品群によく見られるものだ(図17)。もとはうさが森林飯店の事件を“黒猫警長”に通報しているのだが、下図は“ドラえもん”世界の異変を“しずかちゃん”から聞いているところである。

そのほか、“黒猫警長”がトランシーバーでヘリコプター部隊の出動を要請する場面や、“黒猫警長”が傷ついた“白ハト諜報員”を抱きかかえる場面なども、書き手たちに好まれたものらしい。そういった図版への偏執は物語にも影響するから、そんなわけでこの“黒猫警長”世界の周縁では、ヘリコプターはよく出動要請される(図18)し、“白ハト諜報員”は見れば傷つき倒れている。

書き手たちがトレースしたのは、アニメやそれを元にした図版だけではないらしい。上にみたような、よその物語世界と交錯する“黒猫警長”物語の中にもまた、人々のトレースの欲望が見て取れる。いまここに、“ドラえもん”世界に黒猫警長が入り込んだ作品を三点収めるといった、きわめて貴重な本がある¹⁶が、第二話の「時間銭箱」と題されたものを見て

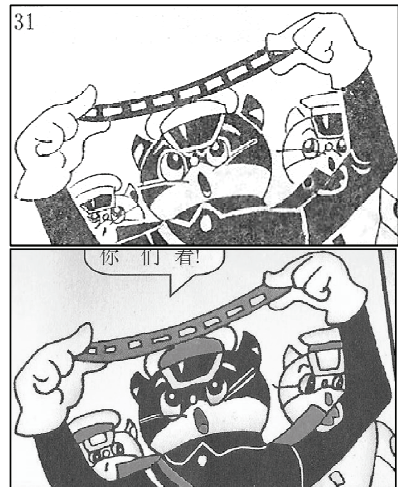


図16 フィルムを眺める場面



図17 通報を受ける場面

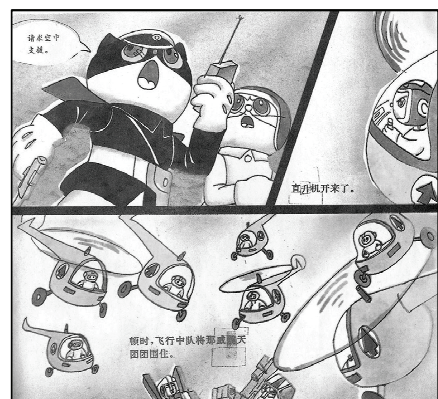


図18 呼ばれるヘリコプター

みよう。この作品を細かく見ていくことで、この種のマンガの書き手と彼の作品製作の作業について、さまざまなことがわかるのである。

物語は、以下のようなものだ。ある日のこと、“ドラえもん”は暇を持て余す“のび太”に「時間貯金箱」という道具を与える。これは、暇な時間を貯めて置いて、好きなときに使うことができるものであるという。“のび太”が時間を好きなように動かしていると、異変に気づいた“黒猫警長”が、捜査に乗り出し、原因を突き止め、犯人である“ドラえもん”らに拳銃を突きつけた。ひみつ道具「空気砲」で対抗の構えを見せる“ドラえもん”。争う二人を見て、「誤解だよう」と取りなす“のび太”。その一言によって両者は和解し、“ドラえもん”が時間を正常に戻すことで、一件落着と相成った。

これは、小学館の学習雑誌『小学二年生』の1977年4月号に掲載された「時間貯金箱」が下敷きになっている¹⁷。時間を自由にできる道具というSF的な成分は、この書き手にとっては、どうしてもよいものであったらしく、“のび太”を守るべく“ドラえもん”が「空気砲」を取り出すあたり、なかなか狂っていておもしろい(図19)。

“のび太”が「誤解だよう」と言って和解に至るあたりも、争いの元が相互の無理解にあるとされている点で、上のヒーロー対決の物語と、流れが同様である。

このマンガ「時間銭箱」の図版を、本物の「時間貯金箱」のそれと比べてみると、全八頁のうち三頁分は、原作のコマを丸々切り貼りしたものであり、そのトレースの量がほぼ半分に迫るほどであることがわかる。残る箇所もおそらくはどこからか取ってきたものだろう。その写し具合も、なんだかぼんやりとしたもので、ときに驚くような無頓着さが垣間見える¹⁸。たとえば冒頭、暇を持て余す“のび太”の左手がなにやらデカいので原作と照らし合わせてみると、もとはそれ、なんとグローブであった(図20)。グローブが書き手にとって身近な物品

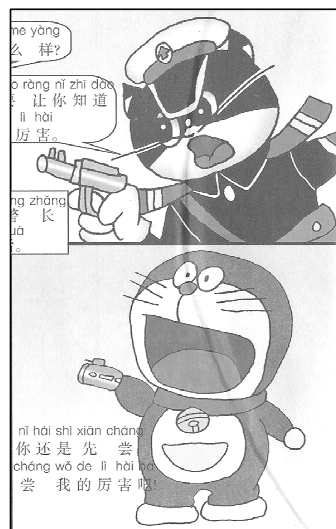


図19 黒猫警長 vs ドラえもん

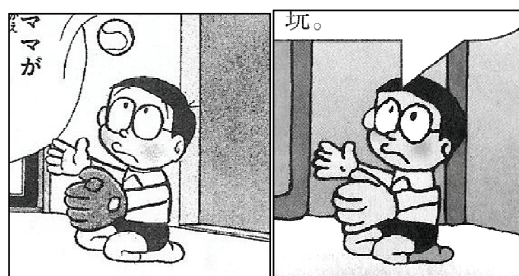


図20 巨大な左手

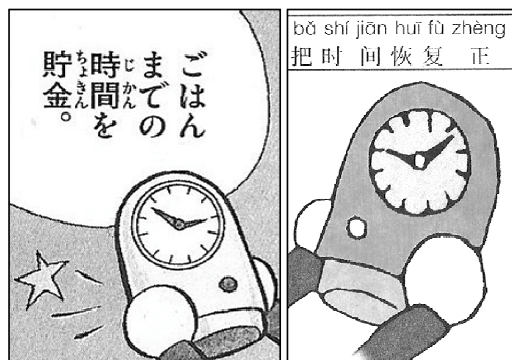


図21 反転した“時間貯金箱”

ではなかったのかもしれない。また、左右が反転した図版が躊躇なく用いられていたりもして（図 21）、あるいはこれは、トレースの際にトレーシングペーパーがうっかり誤用されたことによるのかもしれない。

そしてラスト、“黒猫警長”が野比家に侵入する図版を調べてみれば、この差し挟まれた“黒猫警長”図版もまた、すでにどこかにあるものに他ならず、ここでは、トレースの作業に加え、パッチワークの作業がなされたと、どうやらそういうことらしい。太枠に引いたのは、上でも用いたマンガ『黒猫警長』から、第一話、小麦粉だらけになった“倉庫あらし搬倉鼠”に“黒猫警長”が放水するよう指示する場面の図版である（図 22）。

また、このような日本のマンガをトレースした図版を眺めるとき、筆者がもっとも注意するのは、その足の描かれ方である。周知の通り、中国の人々は基本的に、部屋の中でも靴をはいたままなのだが、周縁の書き手たちは、そのことをうっかり、日本の家屋にも適用してしまうことがあるらしい。この「時間銭箱」の書き手もまた、他の箇所では注意深くトレースを行ないながらも、しっかりと、靴を示すラインを書き足してしまっている（図 23）。

これら「似通った」図版の存在は、こういったマンガの書き手たちが作品を製作するにあたり、トレースが日常的なものであったことを示している。ここで、そのようなトレースの痕跡をもって、商品全体を模造品コピーであると見做し、見るに値しないものといった判定を下すことも、もちろんできるわけだが、彼らとて完全な模造品を作り得たわけでもないようであり、つまりはトレースの欲望といっても、そこまでストイックなものでは、どうやらないようなのである。

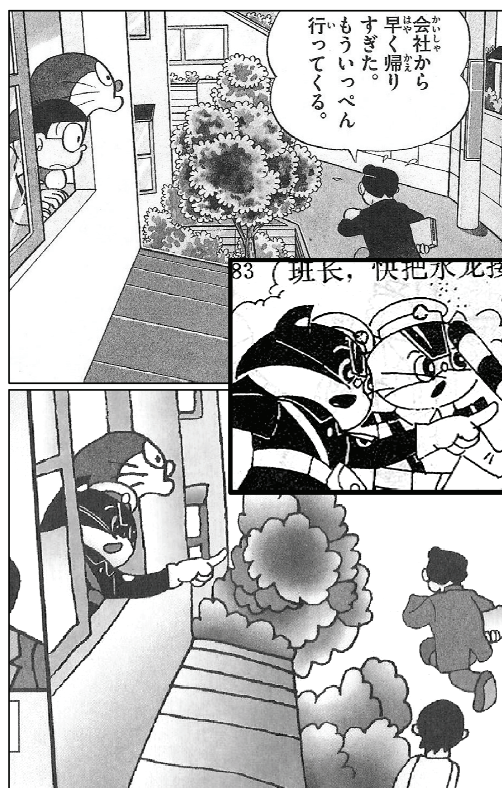


図 22 侵入する“黒猫警長”



図 23 土足で踏み込む“のび太”

はしっこに遊ぶこと

本稿で眺めてきた“黒猫警長”物語は、すでに述べたとおり、いずれも原著者の名が冠されない。したがっていずれも、二次的著作物、と呼ぶにふさわしいものであるだろう。ならば上に記したようなあれこれは、単に、中央からうんと離れたものたちが、権力者の目に見えぬところで、ああだこうだと勝手なことを言って遊んでいるだけのことなのだ。それは、人のもともと持っている「物語る力」や「真似る力」に由来する、不変の営みに属するようなものなのだろうが、作り手の権利が叫ばれる昨今、そういった原始の力も、むやみに発揮してはいけならしい。

むろん、権力者たちが目を光らせることも、重要なことではあるだろう。ただし、みんながみんなその側に立つ必要も、とくにないように思われるのである。あたかも権力者におもねるかのように、「またパクってる」だの「さあすが中国」だのと言いつつ、ほんのつかのま、中国の真相を言い当てたような気持ちになって、その優越感に浸ることほど、くだらないものはない。そんなヒマがあるのだったら、彼らの作り出したものを、じっくりと眺めてみようではないか。

それはつまり、はしっこに遊ぶことと言える。そういったときこそ、ぼくらは、鏡のかけらと出会う可能性に、身を引き締めなければならないのだ。

注釈

¹ メタスバンウェイ、現地では“Meters/bonwe”あるいは“美特斯邦威”と表記する。“黒猫警長”のキャラクター使用権は三年で三千万元以上とも言われる（李鴻光「《黒猫警長》著作権風波」、『法律与生活』2011.1（下）50-51頁）。

² 本稿で取り上げる“黒猫警長”というキャラクターがどのようなものかを、よりはっきりと考えるために、「意味」「内面」「図像」の三つの側面から整理してみたならば、以下のようになるだろう。“黒猫警長”は、高度な科学力と的確な判断力で森の動物たちを守る「正義の味方」という「意味」が先行するキャラクターであり、その“黒猫警長”なる名とこの「意味」という要素こそが、彼の同一性を担保している存在であると言える。「内面」について言うなら、森林公安局の長として、統率力に優れ、判断を誤ることがない冷静さを常に持ち合わせ、いつでも敵にひるむことなく果敢に立ち向かうといった、強気で頼もしい存在として、揺らぐことがほぼない存在であるが、物語によっては、失敗も反省も成長もする存在として描かれたりもする。それは言い換えれば、この分野での伝統的なE. M. フォースターの分類（『小説の諸相』参照）でいうところの「ラウンドキャラクター」的な側面も見せるということであり、その「内面」は「意味」ほど固まったものではなく、ある程度、書き手の恣意に委ねられた領域であると言える。「図像」に至っては、現在、84年版アニメのそれが唯一のように見えもするが、歴史的に見ればそういった認定はごく最近のことのようであり、過去にはさまざまな形が“黒猫警長”として、寛容に受け入れられていた経緯があるらしい。そのため、この点は、「制服を着ている」「左上と帽子に矢印のマークがある」「長いヒゲが左右に伸びている」「黒い」などの特徴が認められる存在である、と言った程度に止まるべきだろう。その「図像」のバリエーションについては、注4に示した拙稿を参照されたい。この項目については、小田切博『キャラクターとは何か』（ちくま新書、2010）pp. 101-136を参照した。

- ³ ここで、本稿ではこれら「二次的著作物」について、日本もしくは中国の著作権法の観点からは一切取り扱わないことをお断りしておく。本稿の指す「二次的著作物」は、日本の著作権法第二条十一に「著作物を翻訳し、編曲し、若しくは変形し、又は脚色し、映画化し、その他翻案することによって創作した著作物」と定義されるそれを指すが、それらに加えて「二次的著作物」を下地にしたと思しい著作物、つまり「三次的」というべきものもまた含んでいる。さらに、ときにこの種の著作物に対して「二次創作」ということばが用いられることもあるが、小田切博氏によればこのことばは「コミュニティ内で用いられている隠語的表現」とのことであり、日本におけるこのあたりの事情については、前掲小田切氏著『キャラクターとは何か』pp. 96-97 に言及がある。その他、著作権情報センターのHP (<http://www.cric.or.jp/index.html>) を参照した。
- ⁴ 現在目にすることができる“黒猫警長”物語のバリエーションの豊富さと、それらが作り出す“黒猫警長”世界の、その内部で起こっている興味深い事象については、以下の拙稿を参照されたい。「森のみんなは、あなたに敬礼！——“黒猫警長”の偉大なる活躍を追う試み(1)」(『火輪』第28号 pp. 46-72、『火輪』発行の会、2010.9)、「終わりにき戦い——“黒猫警長”の偉大なる活躍を追う試み(2)」(『火輪』第29号 pp. 30-53、『火輪』発行の会、2011.3)、『黒猫警長新伝』翻訳——“黒猫警長”の偉大なる活躍を追う試み(3)」(『火輪』第30号 pp. 20-39、『火輪』発行の会、2011.9)。
- ⁵ 以下、物語を提示する際、その根拠となる書誌の情報は、注に記す。なお筆者は、これら周縁に位置する二次的著作物に関して、外側と中身の不一致を痛感しており、そのため外側(表紙や奥付)に記される書誌情報を丁寧に記すことに、それほど意味を感じていない。たとえば、“トランスフォーマー”をゲストに迎えた“黒猫警長”物語(後述)が、全く同じ図版を収める物でありながら、1994年の珠海出版社版は『黒猫警長伝奇』と題する表紙を付し、1998年の新疆青少年出版社版は『黒猫警長』と題する表紙を付している状況を、筆者はすでに確認しているのである。このような事例からは、表紙がきわめて恣意的なもので、きわめて大雑把な標示の役割しか担っていないことが指摘できる。ただし、それらの発行数に関して、仮に外側の記述を信じるなら、少ない物で5000部、多い物だと50000部とのことであり、そのイカゲンな状態での流通が、そこそこの程度あったこともまたうかがえるのである。
- ⁶ 『新編児童故事画冊』(責任編集：桂鎮教、美術策劃：張中華、延辺人民出版社、1999) 参照。図3～図5はこれによる。
- ⁷ 第一話は、内容的にも図像的にも、先行するマンガ本(『葫蘆娃大戦黒猫警長』責任編輯：董彦、編文：王娜、絵図：李明文、陝西攝影出版社出版、1994)の影響下にあるものだろう。これは、葫蘆兄妹がひょうたん泥棒を追って、黒猫警長が仕切る森林王国と武力対決する物語である。本作について、筆者は前半部分しか目にし得ていないため、結末については定かではないのだが、裏表紙にある「内容簡介」によれば、孫悟空の支援を受けて事態の収束に向かうらしい。孫悟空が援助者として登場する“黒猫警長”物語には、他にも『孫悟空暗助黒猫警長』(編文：霍新、絵画：張糧など、中国連環画出版社、1990)がある。第二話は、森林飯店なるホテルが、白アリの被害に遭うあたり、諸志祥原著とされる「森林飯店の災難」というのはなが下敷きとなっている。「森林飯店の災難」は、『黒猫警長』(三)(原著：諸志祥、編絵：戴鉄郎など、上海人民美術出版社、1988。『动画大王』画庫の一つ。)所収のものを参照。ちなみに、1993年に北京で作られたアニメーションにも、この物語を元にした作品が収められる。第三話は、「一只耳」という84年版アニメのキャラクターがそのまま登場しており、第四話「喫丈夫的螳螂」など、事件の裏でちょろちょろ怪しげに動き回る一只耳がそのまま犯人に仕立てられた、つまりはそんな物語であるといつてよい。
- ⁸ このような展開が周縁に位置する作品群にのみ見られるものではなく、諸志祥原作の小説という、その世界の真ん中に位置する作品にもまた見られることを指摘しておく。小説『黒

猫警長』は、その後半部において、“黒猫警長”と棒槌星人との対決を軸とするが、彼らの目的がただ地球のエネルギーを狙うことにあり、地球侵略にはないことを知るや、両者は和解へと向かい、そして新たな霊神星からの侵略者が現われるに及んで、両者は侵略者の撃退のために手を組む、といった展開となるのである。ここには、本稿で取り上げた周縁の作品群からうかがえるような、誤解と解消、そして真の敵を倒すための協力、といった流れが見られるのである。

⁹ 『最新黒猫警長』（責任編輯：張宇心、美術策劃：小太陽、新疆青少年出版社、1998）参照。図6～図8はこれによる。

¹⁰ 『黒猫警長伝奇』（絵画：張光連、編文：呈喜紅、珠海出版社、1994）参照。図2、図9、図10、図15、図18はこれによる。内表紙に「黒猫警長大戦変形金剛」と記されている。また、『黒猫警長』（責任編輯：杜芳清、封面設計：陳紅枚、新疆青少年出版社、1998）にも、『黒猫警長伝奇』から内表紙を除いたすべての版面が収められている。

¹¹ 例えば、東映などによって作られた『救急戦隊ゴーゴーファイブ vs ギンガマン』（長石多可夫監督、2000）は、二組のヒーローの名がタイトルに、あたかも「対決」の構えを見せるかのように配されているが、実際に二組のヒーローが「立ち向かう（vs）」のは、別に存在する「真の敵」なのであって、両者の「いさかい」は、あったとしても、この「真の敵」を倒すための口論程度のことに過ぎず、物語のポイントは、一貫して、共通の敵を倒すことに置かれていると言ってよいだろう。また、『爆竜戦隊アバレンジャーvs ハリケンジャー』（渡辺勝也監督、2004）や『特捜戦隊デカレンジャー対アバレンジャー』（坂本太郎監督、2005）などは、冒頭、両者が戦う様子が描かれはするものの、これも観客へのサービスめいたものに過ぎず、両者はすぐに和解し、「真の敵」に立ち向かうために協力するようになる。したがって、これら日本のスーパー戦隊シリーズにおける「対決」は、本稿で扱うような物語が、二組のヒーローの直接対決それじたいにポイントを置き、両者の和解の後、真の敵があつという間に倒されてしまうのとは、一線を画するように思われる。

¹² 『黒猫警長』（責任編輯：杜芳清、封面設計：陳紅枚、新疆青少年出版社、1998）参照。

¹³ 『超級黒猫警長』（責任編輯：李麗、封面設計：芸小文、青海人民出版社版、1995）参照。内表紙には「黒猫警長対戦猪八戒」と題されている。一つのはなしが（なぜか）上下二つに分かれており、後半部分は『黒猫警長』（責任編輯：孔繁品、封面設計：李君、中国人事出版社、1997）なる名の本に収められている。図11、図12はこれによる。

¹⁴ 『黒猫警長奇遇聖闘士』（責任編輯：黄楠、封面設計：貴族、晨光出版社、1995）参照。図13、図14はこれによる。

¹⁵ 『黒猫警長』（編文：戴鉄郎、絵画：戴鉄郎、范馬迪、上海人民美術出版社、《动画大王》叢書、1986）参照。図15～図17はこれによる。戴鉄郎氏は84年版アニメ『黒猫警長』（および2010年の映画『黒猫警長』）の監督を務めた人物。このほか、アニメの改編本に中国電影出版社版『黒猫警長』（改編：婁平、1987）がある。

¹⁶ 『黒猫警長大戦叮嚀猫』（責任編輯：李麗、美術策劃：芸小文、青海人民出版社版、1999）参照。図16、図17、図19～図23はこれによる。

¹⁷ いま『藤子・F・不二雄大全集 ドラえもん（9）』（小学館、2010）pp.97-103 参照。図20～図23は、これによる。

¹⁸ 日本のマンガが中国へ渡る際に、どのような加工が施されるか、と言った点については、明木茂夫氏の一連の論考「オタク的翻訳論 日本漫画の中国語訳に見る翻訳の面白さ」（2007.12～）がたいへん参考になるだろう。今回はとくに、巻五（2009.3）を参照した。これは、日本の『らんま1/2』が、中国の『乱馬1/2』に翻訳される際、頻出する乳房や乳首がどのように隠されたかについて、豊富な事例を挙げて述べたものである。